

目次

魚津知克 「CEDACH と私」

清野陽一 「JADH 参加記」



● CEDACHと私

「CEDACH と私」という問いに対し、正直に申し上げて、その答えをいまだに十分に準備できていません。

東日本大震災の被害をニュースで知ったときには、無我夢中でした。ソーシャルネットワークをはじめとする様々な手段でみなさんに呼びかけ、すぐに金田さんはじめ何人かの方からご返事をいただき、CEDACH の活動を始めることができました。そのきっかけとなったのは、私自身は直接携わっておりませんが、阪神・淡路大震災で文化財の保全に取り組んだ経験を持つ方々が周囲にいらっしゃったことです。被災・復旧・復興の段階を通して、文化遺産の保全に取り組んだ経験をお伺いしていたことが、基礎になったと思います。

CEDACH の活動は、その後、いくつかの局面をへて、現在に至っています。メンバーのみなさんのおかげで、その経緯はウェブサイトやニュースレターでお知らせすることができています。定例会をはじめとした意見を出し合う場を確保していただいていること、そして「防災遺産学の確立」をはじめとする活動へ支援をいただいていること、文化遺産保全活動の内容を内外へ広く周知しつつあることは、メンバーのみなさんのご協力、そしてメンバー以外の方のみなさんのご関心なしにはできないことでした。このように考えると、「CEDACH と私」という問いに十分答えられないのは、私の方の問題だということがわかります。

「東北と関西のような、離れた地域の文化遺産保全活動は、どのようにつながっていきけるのか？」

「世代や立場もさまざまな、内外の研究者コミュニティの中で、どのようにつながっていきけるのか？」

「ボランティアとして参加していただいた方々と、一方通行でないやり方で、どのようにつながっていきけるのか？」

私自身の課題として考え、自分の言葉で答えを出していこうと思っています。(魚津)

● JADH 参加記—JADH でニュージーランド・カンタベリー地震アーカイブプロジェクトに関する発表を聞いてきました

さる9月15日(土)・16日(日)に、東京大学工学部

におきまして、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会(The Japanese Association for Digital Humanities:JADH) 第2回大会 "Inheriting Humanities" が開催されました。私は個人的な研究発表のために参加したのですが、他の発表の中に、2010年から2011年にかけてニュージーランドで発生し、2011年2月にはクライストチャーチ市において多数の犠牲者を出したカンタベリー地震のデジタルアーカイブに関する報告がありましたので、それをご報告致します。

発表はカンタベリー大学の James Smithies 博士による「DH and Disaster Management: An Overview of the UC CEISMIC Digital Archive」というタイトルで、カンタベリー地震後の様々な情報を集めて、記録・集約・公開をするという活動をインターネットを通じて行う、デジタルアーカイブの取り組みの紹介とそのシステムの説明、さらに実際のデモでした。このプロジェクトは、カンタベリー大学でこのアーカイブを整備することを目的に設立された、デジタル人文学の新しいプログラムが中心となって、国立図書館や各種行政機関、映像や報道などの民間メディアなどの協力の下、カンタベリー地震の記憶を恒久的に残していくために、地震に関する資料を収集し、それをアーカイブしてアクセス可能な形にすることを目的としたものです。

その成果は <http://www.ceismic.org.nz/> こちら(図1)に集約されており、誰でもアクセスし、利用できるとともに、市民も協力してこのアーカイブを充実させられることが特徴となっています。アーカイブは2つの部分から構成されており、ニュージーランド政府文化・遺産省の



図1 UC CEISMIC Digital Archive トップページ



図2 QuakeStudies トップページ

「QuakeStories」とカンタベリー大学の「QuakeStudies」(図2)から成り立っています。これらの配信基盤は主としてカンタベリー大学が提供しています。

発表内容は、その概要と、体制、またバックエンドの技術的な仕組みについての紹介が中心でしたが、最後のデモの部分で紹介された事例が興味深いものでした。それは上記のアーカイブの一部として整備されている発掘調査報告書の検索・閲覧・配信システムです。カンタベリー地震からの復旧のために、都市部では遺跡の確認調査が頻繁に行われているようで、それにとまって確認調査報告書が数多く出されているようなのですが、Webページ上のスクロールできる地図上に調査された地点が示されていて、その場所をクリックすると、その発掘調査に関する情報や、更には報告書のPDFファイルにリンクが貼られていてすぐに開いて読めるようになっていました(図3)。このようなシステムが利用出来るようになるにはその前提として、発掘調査が行われると、その報告書がPDFで提供され、さらに発掘調査の場所も地理情報としてきちんとデジタルで管理されている事が必要となりますが、それがきちんと制度として運用されているからこそ、都市の復興に関わる全ての人々が等しく、遺跡の情報にアクセスすることができるようになっています。アーカイブの体制やシステムも素晴らしいものでしたが、考古

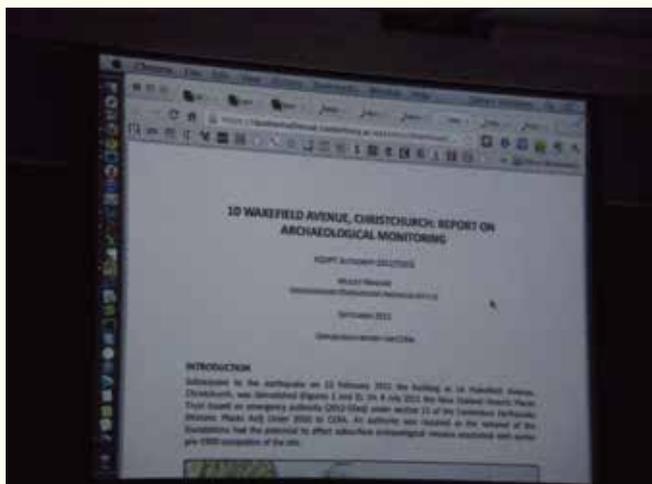


図3 発掘調査報告書のPDFファイルを開いたところ

学に携わる者としては、この完成されたスマートなシステムに非常に感銘を受けました。発掘調査が実施されてからPDFでこのシステム上で公開されるまでのタイムラグも短くなっているようです。

現在、この発表をされたJames Smithies博士と連絡を取り合い、CEDACHメンバーの藤本さんとともに、このプロジェクトとCEDACHの間で情報交換をしようという機運が高まってきております。国を超えて、同じ地震という自然災害に対応する文化遺産に関わるもの同士が連携してお互いの良い部分を学び合っていければいいと考えております。(清野)

● 石巻文化センター文献カード入力作業

- 校正作業のお手伝いをして下さる方を募集中 -

これまでに撮影を終えた石巻文化センターの文献カード入力作業は、おかげさまで終了いたしました。様々な地域にお住まいの40の方々々が貴重な時間を割いて入力作業にご協力くださいました。本当にありがとうございます。

現在は大手前大学史学研究所での校正作業に関わるボランティアのみを募集しております。木曜日を基本作業日としていますが、事前にお申し出いただければ、火・水曜日でも作業していただけます。引き続きご支援・ご協力をたまわりますようお願い申し上げます。(事務局)

編集後記

今号では、清野さんが日本デジタル・ヒューマニティーズ学会参加記を寄稿してくださいました。特に、ニュージーランド・カンタベリー地震のデジタルアーカイブの報告について、詳細な紹介をしてくださっています。私達が学ぶ点も多くあり、情報交換も始まりつつあります。年末は、各地で自然災害・文化遺産に関連するシンポジウムや講演会などが数多く開催される模様です。参加されましたら是非、参加記として本ニュースレターに寄稿頂けると幸いです。(広報チーム)◇

CEDACH ニュースレター Vol.05

2012年11月22日発行

編集・発行

CEDACH 広報チーム

〒662-0965 兵庫県西宮市郷免町 8-17

大手前大学史学研究所内 CEDACH 事務局

TEL : 0798-32-5007

FAX : 0798-32-5045

E-mail : info@cedach.org

URL : http://cedach.org